フランクフルトにおけるエルンスト・マイの 住居形式の展開と最小住居への取り組み

THE DEVELOPMENT OF THE DWELLING TYPES PLANNED BY ERNST MAY IN FRANKFURT A.M. AND HIS APPROACH TO THE MINIMAL DWELLING

海老澤 模奈人^{*}
Monado EBISAWA

This paper discusses the development of dwelling types presented by Ernst May from 1925 to 1930 in Frankfurt a.M. through analyzing his texts and exhibition. In his planning of housing estates in Frankfurt May aimed to build low-rise one-family-houses with garden as an ideal dwelling type. But because of serious housing shortage more economical apartments were gradually required. From autumn 1928 he gave priority to the planning of minimal dwelling. His attempt to design efficient dwelling types was reflected not only in a series of dwelling unit types published in 1930 but also in the CIAM exhibition in 1929.

Keywords : *housing estate, Ernst May, minimal dwelling, Frankfurt a.M., CIAM, dwelling type*

ジードルンク, エルンスト・マイ, 最小住居, フランクフルト, 近代建築国際会議, 住居形式

1. 序

1-1. 論文の目的と方法

ヴァイマル共和国時代のドイツでは、第一次世界大戦後の住宅不足を解消するために中低所得者を対象とした大量の住宅供給が模索された。その中でも、エルンスト・マイ (Ernst May: 1886-1970) は、1925-30 年にフランクフルト・アム・マイン市において 1 万 2 千戸と言われる大規模なジードルンク (住宅団地) の建設を主導したことで知られる。彼は英国のレイモンド・アンウィンの事務所で田園都市の実践に触れ、第一次世界大戦後はブレスラウ (現ポーランドのヴロツワフ) の住宅扶助公社の主任として衛星都市の構想を立ち上げるなど、英国起源の田園都市をドイツで発展させようとした人物の一人であった。田園都市の理想に倣うように、ブレスラウでは庭付きの低層住宅地を主に建設していたマイだが、フランクフルトに移ってからは、都市における健康的な住居を志向しつつも、さらに合理的で経済的な住居形式を模索していく。その理由は、端的に言えば、大都市においてできる限り安価に大量の住宅を建設する必要に迫られたためであった。住宅建設の効率化を求める姿勢は、フランクフルトの 5 年間に於いて次第に強まっていく。

本稿は、マイがフランクフルトにおいて庭付き低層の余裕のある住宅地を理想としつつも、次第により効率的かつ経済的な最小規模の住居の追求へと移行していく状況を、マイによる文章とマイらが企画した展覧会を題材として、以下の 3 つの点から考察するもので

ある。第 1 の観点は、機関誌『新フランクフルト [Das Neue Frankfurt]』にマイが発表した文章の比較検討である。その作業を通してフランクフルトでの 5 年間に於ける彼の住宅建設コンセプトの展開とそこで整備されていく住居形式の内容を明らかにする (第 3 章)。第 2 の観点は、1928 年秋のマイの「最小住居」への取り組みを、彼が著した新聞・雑誌記事を史料として明らかにすることである (第 4 章)。そして第 3 の観点は、マイらが 1929 年の第 2 回 CIAM 会議に際して企画した「生活最小限住居」展におけるフランクフルトの出展姿勢を考察し、マイの実際の住宅建設への取り組みとの関係を考えることである (第 4 章)。以上の考察を総合して、マイの 1920 年代後半の活動に関する新たな知見を提示することを本稿の目的とする。

1-2. 先行研究と本研究の意義

マイのフランクフルトでの活動については、これまで多くの研究がなされている。主なものでは、まず 1984 年に C.モアアと M.ミュラー、H.リセによる研究書が出版され、マイらのフランクフルトでの活動の総体が提示された¹⁾。機関誌『新フランクフルト』掲載の主要な論文をまとめた図書が出版されたのもこの年であった²⁾。他方、マイらの主要なジードルンクに関する詳しい解説としては、建築家の DW ドライッセによるドキュメントが注目される³⁾。2011 年にはフランクフルトのドイツ建築博物館でマイの回顧展が開催され、そのカタログにおいてマイの生涯全般の活動が複数の論文によって論じられた⁴⁾。日本では、後藤俊明が政治社会史の立場から、フ

本稿は、拙稿「フランクフルトにおける E. マイの住宅建設計画の展開と住戸形式」(『2012年度日本建築学会関東支部研究報告集 II』2013年 3月, pp.569-572)をもとに、新たな資料調査と考察を加え、大幅に書き改めたものである。

^{*} 東京工芸大学工学部建築学科 准教授・博士(工学)

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Tokyo Polytechnic University, Dr. Eng.

ランクフルトにおけるジードルンク建設の経済的背景、建設理念と実現状況を広く論じている⁵⁾。以上のようにマイらの活動に関する研究はこれまで多くなされているが、管見の限りでは、前節で述べた第1の観点、すなわち『新フランクフルト』のマイによる文章を比較し、彼の住宅建設コンセプトの展開と住居形式を論じる研究は十分になされていない。また、第2の観点であるマイの最小住居への取り組みに関しては、本稿では史料館での新聞記事の調査を通して新たな史料を入手し⁶⁾、このテーマについて具体的に論じることを試みた。そして第3の観点である「生活最小限住居」展に関しては、その展示内容についてこれまで具体的な検討を行っている研究はほとんど見られない⁷⁾。以上述べた新しい観点や新しい史料を通して、本稿はマイのフランクフルトでのジードルンク建設に見られる新たな側面を提示することを試みるものであり、その点に本研究の独自性と意義を主張したい。

1-3. 用語の定義

本論を記述する上でキーワードとなる用語について予め整理する。まず、マイが住居の形式を分類する上で用いた「Einfamilienhaus」「Zweifamilienhaus」「Mehrfamilienhaus」という独語に対しては、それぞれ「一家族用住宅」「二家族用住宅」「多家族用住宅」という訳語を当てる。「一家族用住宅」とは、各住居が外部に対して個別の入口を持ち、さらに複数の住居が垂直方向に積層しない形式と定義することができる。その典型は一戸建ての独立住宅だが、住居境界壁を共有して連続するテラスハウス式の住宅であっても、各住居が外部から別個にアプローチする形式を取れば「一家族用住宅」となる。一方で、一見すると2階建てのテラスハウスのように見えるが、1階と2階で世帯が異なるような例は「二家族用住宅」となる(図1がその例)。二家族用住宅には、このような二住戸積層形式のものに限らず、広義には二住戸が隣り合い一つの住棟を構成する形も含まれると考えられるが、フランクフルトでのマイの提案においては、上述の二住戸積層形式に限られるため、本稿でマイの住居の提案に関して「二家族用住宅」と言う場合、この二住戸積層形式を指すものとする。他方、「多家族用住宅」は、一つの階段室を多くの家族が共有するような一般的な集合住宅の住居を指す。この多家族用住宅の住棟には、各住戸の玄関が階段室に面する形式と、吹きさらしの外部廊下から各住戸に入る形式がある。独語で「Außenganghaus」もしくは「Laubenganghaus」と呼ばれる後者の住棟形式は、本論で述べるようにマイの住居形式の展開を考える上で重要であり、本稿では「外廊下型住棟」と呼ぶこととする。対して前者を必要に応じて「階段室型」と呼ぶこととする。また、多家族用住宅の住居の属性の一つとして、二層の住居が住棟に挿入される「メゾネット形式」の住戸に対して、一つの住戸が一層のみの一般的な形式が「Etagenwohnung」もしくは「Geschößwohnung」と記されることがある。本稿ではその訳語として、「フラット住居」という訳語を当てる。本稿で「住居形式」と言う場合、以上に述べたような住居の特徴を表すさまざまな形式を包括したものを指している。

住居規模を表す言葉としてこの時代に多用される「Kleinwohnung」「Kleinstwohnung」については、それぞれ「小住居」「最小住居」という訳語を用いる。他方、1929年のCIAM会議および展覧会のタイトルである「Die Wohnung für das Existenzminimum」に対しては「生活最小限住居」という訳語を当て、展覧会で出展された住居事例に

については「最小限住居」と呼ぶこととする⁸⁾。

住居平面の標準型を提案する際に用いられた「Typisierung」という概念には「定型化」という訳語を当てる。それに対して、大量生産に適するように建具や部材、家具など建築の部分に統一的な規格を設けることを指した「Normalisierung / Normierung」という概念には「規格化」という訳語を当てている。

2. ブレスラウ時代のマイの活動

3～5章の考察に先立ち本章で、フランクフルトでの活動の基盤を作ったブレスラウでのマイの活動について簡潔に触れておく⁹⁾。

マイは第一次世界大戦後の1919年2月、シュレージエン地方のブレスラウ市へと招聘された。彼の活動の拠点となったのが、同年6月にプロイセン州の住居法により住宅扶助公社として創設されるシュレージエン住宅〔Schlesische Heimstätte〕であった。同社は資産の乏しい人々に健康的で実用的な住居を安価に提供することを使命とし、戦前からの住宅供給の理想を引き継ぎ、庭付きの持ち家の供給を目標とした。プロイセン州と地方自治体、建設協同組合などを共同出資者とする同社は、自身が施主となることは少なく、建設用地の開発、建設計画への資金援助、安価な建設資材の開発、家具の考案などを通して、その地域の住宅地建設に影響を与える存在となった。マイが率いた建設部門は、同地方での標準となる住居タイプの考案や住宅地計画に取り組んだ。彼はここで『シュレージエンの住まい〔Schlesisches Heim〕』という機関誌を編集し、住宅建設に関する研究と啓蒙活動を進めていく。

ブレスラウ時代のマイの活動で重要なのが、衛星都市の提案である¹⁰⁾。これはブレスラウ市とその周辺部の建設構想を募る設計競技で提示されたものであり、既存の中核都市から20-30km離れた土地に5-10万人規模の半自立型の衛星都市を分散的に建設し、その間を緑地とすることで都市の無秩序な拡張を抑制する提案であった。E.ハワードの田園都市の構想に近いが、衛星都市にはそこまでの独立性はなく、大規模な都市施設については中核都市に依存する半自立的な性格が特徴である。共同作業者のヘルベルト・ベームとともに作成したマイのこの提案は特別賞を獲得するが、ブレスラウの都市規模には適さないものでもあった。

このようにブレスラウ時代のマイの仕事には、標準的な住居平面の提案、建築材料の実験、衛星都市の構想、機関誌の発行など、後にフランクフルトで展開される活動がすでに見られた。

3. 『新フランクフルト』における住宅建設コンセプトの展開と住居形式の整備

ブレスラウ時代のマイの活動は、フランクフルト市の住宅建設のために有能な建築家を探していた新市長ルートヴィヒ・ラントマンの目に留まる。1924年に市長の職に就いたラントマンは、1917年という早い時期からジードルンク担当の必要性を訴えていたほど、住宅建設と都市計画の推進を重視していた政治家であった。1925年にマイは市長に請われ、故郷フランクフルトへ移った。同年9月1日に彼はフランクフルト市の建築・都市計画を統括する部門の責任者に着任した¹¹⁾。秋には同市の住宅不足を10年間で解消するための住宅建設プログラムを提示する。マイはその強力な権限の下、共同作業者として前任地ブレスラウなどから様々な専門家を集め、自

身の下にジードルンク建設のための組織を結成していく。

翌 1926 年秋には機関誌『新フランクフルト』を創刊した。この雑誌は、建築・都市のみならず、絵画、写真、ファッション、スポーツ、乗物デザインなども特集する総合的な文化・芸術誌となっていくが、柱となるのは最新の建築の動向であり、マイはそこでフランクフルトにおける自身の住宅建設の指針と成果を公表していった。彼の在任中に同誌には、マイ自身によるフランクフルト市の住宅建設に関する包括的な文章が、以下に示すように 1927、1928、1930 年の 3 回掲載されている¹²⁾。

「フランクフルト市の住宅政策」(1926/27 年 5 号(1927 年 4-6 月号))
「フランクフルトの住宅建設政策の基本」(1928 年 7-8 号(7-8 月号))
「フランクフルトでの 5 年間の住宅建設」(1930 年 2-3 号(2-3 月号))
本章ではこれらの記述を比較検討することで、マイの住宅建設コンセプトの展開と住居形式の整備の実態を明らかにしていく。

3-1. 住宅建設コンセプトの展開とその実現状況

最初に、1925 年秋の住宅建設プログラムについて述べておきたい。これは上記の文章には具体的に記されていないが、1926 年にマイが著した新聞記事から概要を知ることができる¹³⁾。彼が対象とした住宅不足とは、「戦争に起因する住宅不足」「移住者による住宅不足」「旧市街整備の結果としての住宅不足」の 3 種を総合したものであり、その数は 10000 戸と計算された。そして各年 1800～2000 戸の住居を建設し、同時に学校、市場等の公共建築も実現していくとした。「一住居ごとの平均建設費は 10000 マルク」と見なし、「低層建築が優先される」とも記されている。

続いて上記 3 つの文章を年代順に検討することで、マイによる住宅建設コンセプトの展開とその実現状況を論じていく。

マイが 1927 年の文章で示しているフランクフルト市の住宅建設の基本理念は明瞭である。それは、前時代の非人間的な住環境を排し、より人間の健康に適した住居を造り出す点にあった。彼は次のように述べている。「多くの場合美的な面に偏るかたちで取り組まれた前世紀の都市計画は、基本的な要求を満たせていなかった。セメントで固められた中庭をもつ 5 階建ての賃貸兵舎は、裏手の建物によって陰が生じ、庭もなく、人間の生活条件に適していない。都市のもっとも貴重な財産である人々の健康の保護は、あらゆる行政措置に影響を与えなければならない。¹⁴⁾

そして都市構造の問題点としてマイは、「大都市の一点集中的で均質な拡大が、都市住民の健康条件をもっとも危うくする」とし、「都市を分散し、個々の都市集合体をそれぞれ完結したものとして開放的な土地のなかに埋め込む必要がある」と主張する。この点は明らかにプレスラウ時代の衛星都市の構想を引き継いでいる。彼はまた「[フランクフルトにおける]市中心部の土地は住宅建設にとっては高価であるため、都市周辺部の土地を農業利用から住宅建設へと転用しなければならない」(括弧内の補足は引用者による)とも述べており、経済的な観点からも衛星都市の建設は理に適うものとされていた。住宅の形式としては、「庭付きの持ち家[Eigenheim]」が理想であるが、それができないとしても「安価な土地にのみ実現可能な要求である、できる限り多数の健康的な低層賃貸住居によって、自然に近接する居住形態が補完されることが求められる」とした¹⁵⁾。

続く 1928 年の文章では、新フランクフルトにおける具体的な建設実績が示されていく。「1926 年には 1200 戸の見込みに対して約 2200

戸を建設、1927 年は 1400 戸の見込みに対して約 3000 戸、1928 年には約 2500 戸¹⁶⁾」と、当初の予定よりも速いペースで住宅建設が進められたことが記されている。さらに 1927 年と 1928 年にはそれぞれ 200、100 戸の応急住宅も建設された。しかしそのような実績にもかかわらず、「過去半年間に限っても新たな住居希望者が 4000 組も加わっている状況であり、住宅建設プログラムにおける各年の建設数は今後数年においてさらに著しく増大させなければならない」とマイは述べており、住宅供給のさらなる拡大の必要性をここで主張している。この文章ではさらに、土地政策と関連して、計画的な住宅地開発のための土地収用の必要性が提唱されている点も注目される。「計画的な都市の建設を進める近代の大都市は、土地収用権なしでは目的に到達することがほとんどできない¹⁷⁾」とマイは主張するが、それは彼がフランクフルトという大都市での住宅地建設を進めていく上で実感した現実的課題であったと考えられる。

一方、衛星都市型の住宅地構想に関しては、より具体的な記述がなされている。マイは郊外地に建設される衛生都市の特徴を、「切り離された拡張地区には、住民が日々の生活に必要とするあらゆる施設を用意する。店舗と学校がそこに建設され、手工業者や自由な職種の人々が入植する。衛星都市内の職場が徐々に、この土地の住人の少なくとも一部に、住居のすぐ近くで収入を得る機会を与えるようになっていくべきである」と説明する。対して中核都市については、「大学、大規模な病院や銀行、劇場などはこれまで通り中核都市に限定する」と述べ、衛生都市との性格の違いを明示した。そして、「バス路線、近距離電気鉄道、国営鉄道郊外線などの便の良い交通手段が、衛生都市と中核都市を結ぶ」と述べる。さらに衛生都市間に設けられる空地については、「徐々に農業やレクリエーションのさまざまな用途のために利用されるようになっていくべきである」とし、「スポーツ場と遊び場は、農業や園芸用にまとまって開墾される土地から距離を置かせる」とも説明している¹⁸⁾。この空地の農業・園芸利用と関連して、続く段落において、「市民の健康に大きな意味のあるもの」として「小庭園利用者のための長期賃貸庭園[Dauerpachtgärten für Kleingärtner]」の重要性が述べられている点も興味深い。マイはそこに住居専用庭を代替するものとしての可能性を見ているようであり、実際にジードルンク・レーマーシュタットの建設に際して、近接地に長期賃貸庭園群が市のジードルンク局によって用意されたことを説明している¹⁹⁾。

1930 年の文章は、タイトルからわかるように、フランクフルトにおけるマイらの 5 年間の活動の成果を振り返り、住宅建設の基本方針を整理したものであった。この文章が掲載された 2・3 月合併号から続く 4・5 月合併号にかけて、マイは過去 5 年間に彼を中心としたフランクフルト市の組織が同市に計画したジードルンクを中心とする 30 件のプロジェクト（未着工を含む）を紹介している。

文章の冒頭マイは、過去半年間、ドイツの多くの都市が財政的な危機にさらされていることを指摘し、当面のフランクフルト市の方針として、「市民の中でも低所得者層のための住宅建設」を優先することになると述べる。すでに述べたように 1925 年秋よりマイは、住宅不足を解消するための住宅建設プログラムに従って計画的な住居の供給を進めてきた。しかしマイが語るように「喜ばしいことに建設活動はプログラムの目標数を上回るかたちで進展したものの、住宅不足は期待していた速度で減らないことが判明」していく。その

ため 1928 年秋に「続く 4 年間に住宅建設活動を強化し、毎年 4000 戸を供給する」という新しい住宅建設プログラムを作成し、「その相当の割合をいわゆる最小住居とする」ことになったとマイは述べる。最小住居の建設を推進する理由は、「市民の中の低所得者層は、新築住居への入居に関して十分に考慮されておらず、これまでの住居規模を維持したままで彼らの負担できる賃料を設定するのは不可能」なことがわかったためであった。ただしこの計画の受け入れ直後に住宅建設市場における資金調達の困難さが増し、その状況が今日もなお継続しているために、「実際の建設数は、1929 年が 4000 戸の計画に対してわずか 3650 戸、1930 年は 3200 戸」と縮小されることになったとマイは説明する。今後も資金的困難は続くことが予想されるため、「続く数年は 2500 から 3000 戸の供給にとどまるだろう」と彼は続けている²⁰⁾。

一方、自然と近接した衛星都市型の住宅地建設をめざす基本姿勢は、1928 年の説明からほとんど変わっていない。緑地や空地と密接に結びついた健康的な住宅地を形成し、各住居に可能な限り庭を与えるという理想は、1930 年においても維持されている。マイは住居に付属する庭の意義について、「そこにおいてのみ、人間の精神的・身体的健康のためにいくらか評価してもしすぎることはない人間と大地の接触が、大都市ジードルンクという形式の中で育まれ、守られるのである」と改めて語る。しかし実際の成果としては、「過去 5 年間のフランクフルトのジードルンク建設活動では全体で 2560 の住宅付属の庭〔Hausgarten〕が設けられた」ものの、「数千戸には庭を与えられないまま」の状況であることが示される。そしてそれを補うものとして、ジードルンク・ブルッフフェルトシュトラッセ（1926-27）の例を示し、ジードルンク内の「緑地」や、住居への「屋上テラス」の設置などについて言及する²¹⁾。

以上、1927、1928、1930 年の 3 つの文章を比較した結果、マイの住宅建設コンセプトの展開とその実現状況に関して明らかになったことは次の内容である。彼はフランクフルトへの着任初期より、住宅建設プログラムを作成し計画的な住宅供給を進めていた。そこで理想とされたのは、自然との結びつきを重視した庭付き低層の住宅地であり、その理想はマイのコンセプトの中で 5 年間維持されていたと言える。ただし現実には、理想的な衛星都市型の住宅地ばかりが計画されたわけではなく、専用庭をもたないような住居も、マイの理想に反して多数建設せざるを得なかったことも記されていた。また、予想を上回る住宅需要と財政的な問題のために、当初の計画を修正する形で、特に 1928 年秋以降、より小規模な住宅の大量建設が求められたことも、3 つの文章を比較検討することでわかった。それでは、具体的な住居の形式はどのように語られていたのだろうか。同じ文章からマイの言葉を参照してみたい。

3-2. 住居形式への言及

1927、1928 年の文章では、「庭をもつ低層住宅」もしくは「3 階建ての中層住棟」といった大まかな言及²²⁾にとどまっていた住居形式の問題は、1930 年の文章の中で、「高層建築か低層建築か」というタイトルのもとに具体的に論じられるようになる²³⁾。一部、既述の内容と重複するが、その主旨をマイの言葉をもとに述べていきたい。

マイは冒頭で、「集散的に建設するか個別に建設するか」の問いが、建設方法の問題、すなわち「住居が水平に連ねられるか、垂直に積層されるべきか」の決定にかかわってくるという。具体的には「水

平に連ねた場合、一家族用のテラスハウス式住宅が導かれ、垂直の建設方法によれば多層の住棟」となると説明される。

彼は次のように続ける。「自然と近接するゆえに理想的な住居形態は低層の一家族用住宅である。そこでは、集団主義的な反応を強くしめす時代において特別な意味をもつ、家庭内での憩いと隠遁が家族に保証される。このような住居形態のみが、すべての住居に対して、たとえ小さなものであろうと庭との直接的な結びつきを許容する。すなわち、住宅内の居間が居室としての庭〔Gartenwohnraum〕によって拡張され、補足される」。それに対して、「多層の賃貸住棟の中の住居では、一家族用住宅で提供されるような健康的な生活条件が、家族やとりわけ子供に対して補われることはない」。ゆえに「フランクフルトの住宅建設政策では一家族用住宅の建設を意識的に促進してきた」と彼は言う。しかし続けて、「一家族用住宅の建設は、多家族用住宅に人々を収容するのに比べて費用がかかり、財源の不足のために、とくに市民の中の低所得者層を受け入れることを考える場合には、多家族用住宅の建設もあわせて促進されなければならない」とも述べる。さらにそれを補足するようにマイは、「低層建築を維持しながら二家族用住宅もしくは四家族用住宅のかたちをとり、安価な住居の建設を可能とするような過渡的な形式が幸いにも存在する」と述べ、その実践例として、「ジードルンク・ヴェストハウゼンの大部分は目下、二家族用住宅で建設されている」と語る。

ここで言う一家族用、二家族用、多家族用住宅という住居の区分は、マイのそれ以前の文章の中でも断片的に出てくるが、1930 年の文章において初めて系統的に論じられるものである。このように住居の区分を明示しようとする姿勢に、一家族用住宅という理想から二家族用住宅、多家族用住宅という妥協的解決への道を探る、当時のマイの試行の跡が表れているように思われる。

引き続いてマイは、「近代的なフラット住居は今日、とりわけ 3 階もしくは 4 階建てのものに限れば、旧様式の賃貸兵舎の住居と混同されることはもはやない」と述べ、多家族用住宅の建設にも積極的な価値を見出そうとする。その根拠は、「住棟を列状に配置する建設方法²⁴⁾によって保証される都市計画的に欠点のない配置は、近代的な賃貸住棟においてすべての住居に欠点のない採光を与え、住棟間の緑地への開放的な眺めを保証してくれる」からであった。確かに「家族ごとの独立性が不十分なことに加えて、上階の住民にとっての階段昇降という難点や、庭との直接的な結びつきの不足」といった問題はある。しかし「市民の広い層にとっては、悲惨な住まいにおいて将来の理想的な住居を待ち焦がれるよりは、健康的なフラット住居に入居することの方が重要である」と彼は主張する。

さらにこれら多家族用住宅に近年見られる形式として、各階に外部に面した廊下をもつ「外廊下型住棟」についても言及する。マイはこの住棟が「通常の性格をもつ賃貸住棟に比べて大きな利点をもつ」と述べ、その理由として、「すべての住居から住人が直接戸外へ出ることができ、そのため住居内において心理的に狭さを感じるものが少ない」点を挙げる。ただしその建設費は「一番安価な場合でも、階段室に住居が面する賃貸住棟と比べて 8~10%は高額となる」ため、「広い導入はなされていない」と述べられる。

以上のマイの住居形式の説明をまとめてみたい。マイはここで「一家族用住宅」「二家族用住宅」「多家族用住宅」という区分を用いて住居形式の問題を語る。そこでも彼は、低層で庭付きの一家族用住

宅を理想とする自身の主張を繰り返すが、現実的な選択肢としての多家族用住宅の建設にも価値を認め、その意義を説明していく。さらに低層建築でありながら経済的な二家族用住宅や、外廊下型住棟の住居といった新しい住居形式に言及することで、一家族用住宅に変わる住居形式の可能性を示している。

3-3. 定型平面の提示

住居形式の説明に続いて1930年のマイの文章で語られるのが、住居平面の定型化というテーマである。この試み自体は、すでに述べたように彼がプレスラウ時代から取り組んでいたものであり、フランクフルトにおいても初期から中心テーマと位置づけられていた。1927年の文章においてすでに、効率的な住宅建設との関連で「定型化」と「規格化」という二つの概念を提示している。その文章での定型化に関するマイの論拠を要約すると以下ようになる²⁵⁾。

庶民の住居の歴史を振り返ったとき、19世紀半ばまで人々は自らの住居を「定型化」していたとマイは言う。すなわち、「同様の生活慣習や経済状況を基盤として、その土地で手に入る建築素材を用いて統一された形態を創り出していた」。しかし「この合理的な住宅形成のための自明の原則は、前世紀後半の誤った個人主義により手放されてしまった」と彼は述べ、「フランクフルトの住宅建設プログラムは広範囲に及ぶ定型化を基盤とする」ことを表明する。その際、住居内において「合理的な家事が可能かどうか」に特別な価値を置き、それに益するものとして、フランクフルトの住居のために開発された、家事に特化された空間であるフランクフルト・キッチン²⁶⁾の利点を強調する。加えて、階段室のような共用空間の維持費の効率化、共用洗濯室の設置なども重要視するとした。

この定型化の解説は、1930年の文章で詳細になる。「フランクフルトのタイプ」と題して、住居平面の型の基盤となるべき9項目の原則が記されるのである。各項目の要点をまとめて列挙すれば、「1. 家事の労力を最小限にすること」「2. 光と太陽を住居に導くこと」「3. できる限り寝室は朝の太陽を、居間は午後の太陽を受け入れるようにすること」「4. 居間を規模において中心的な空間とすること」「5. キッチン造りは造り付けとし、限られた空間を効率的に使うこと」「6. 両親と子供の寝室を分離すること、また性別で寝室を分けること」「7. 子供の多い家庭には多くの分離した寝室を用意すること、また彼らを低層住宅に住ませること」「8. 便所は必ず用意し、最小住居でも浴槽かシャワーを用意すること」「9. 各住居に地下室と物置部屋を設けること」であった²⁷⁾。そしてこのような原則をもとに計画された「フランクフルトの定型平面」が、同じ号に独特な略号を用いて提示される²⁸⁾。

その1例として図1の平面図を見てみたい。これはジードルンク・ヴェストハウゼン(1929-31)に計画された先述の二家族用住宅を表している。「ZWOFA」という略号は「二家族用住宅」[=Zweifamilienhaus]を表す。ちなみに一家族用住宅ならば「EFA」[=Einfamilienhaus]、多家族用住宅ならば「MEFA」[=Mehrfamilienhaus]である。略号の隣の「3.40」と「3.42」の数字は、それぞれ「3部屋で床面積40㎡」と「3部屋で床面積42㎡」を表している。この場合、1階の住居(図1左)が40㎡で2階の住居(図1右)が42㎡の専有面積をもつという意味である。このように、まず一家族用か二家族用か多家族用かといった先述の住居区分があり、それに加えて「KI = 子供が多い[Kinderreiche]」「ELI = 下宿人住居付き[Einliegerwohnung]」「TE = ルーフテラス付き[Dachterrasse]」「NO = 北向き[Nordlagentyp]」「DOLEI = 二箇所に配管をもつ[Doppelleitungen]」「GANG = 外廊下型[Außengangtyp]」の略号と「部屋数」「床面積」を組み合わせ、フランクフルトでの実例をもとにそれぞれの定型平面を例示しているのである。

このように略号付きで定型平面を示すことで、フランクフルトの住居平面が一つのシステムのもとに整備されていったと考えることができる。そしてここで定型平面として挙げられた21例の内、マイの理想とする一家族用住宅は6例にとどまり、二家族用住宅が3例、多家族用住宅が12例と多数を占める結果となっていたのである。その内容の多様さから見ても、後者に提案の比重が移っていたことは確かである。そしてこの多家族用住宅12例の内の8例は床面積が50㎡以下であり、実質的に最小住居と見なせる規模の住居平面の型となっていた²⁹⁾。

以上見たように、1928年の後、1930年に至る過程でマイは、前節で見た「一家族用住宅」「二家族用住宅」「多家族用住宅」という住居区分に従って、定型平面の整備を進め、1930年の文章においてそれをシステムティックに提示している。このような作業は、フランクフルトでの合理的かつ経済的な住宅供給を象徴的に示す意味合いもあったと考えられる。そしてその定型平面の事例群においてマイは、自身の理想とする低層の庭付き一家族用住宅よりも、より効率の良い二家族用もしくは多家族用住宅、その中でも小規模な住居の建設に重点を移す姿勢を示していたのである。このようなマイの姿勢の背景には、すでに3-1節で指摘したように、住宅不足のさらなる解消と財政的困難に対処するために、1928年秋に彼が住宅建設プログラムを最小住居優先に切り替えたことがあったと考えられる。次章では、マイの姿勢に変化をもたらしたこの1928年秋の最小住居への取り組みについて、彼の文章をもとに具体的に論じる。

4. マイの最小住居への取り組み

マイが1928年秋に新たに用意した住宅建設プログラムは、同年7月、8月の『フランクフルト新聞』の記事に、彼自身の言葉で紹介されている³⁰⁾。彼は記事の冒頭、フランクフルトでの住宅供給の成果と、それでも解消されない住宅不足について説明し、以後は各年4000戸の住宅を建設していく予定であること、そして建設費を下げ、低所得の労働者でも入居可能な家賃を設定するために、その主要な住居タイプとして最小住居の供給を進めていくことを述べる。なお、作者不詳の別の記事では最小住居の供給数は、総建設戸数の少なくとも半数を超える年2000戸以上と具体的に示されている³¹⁾。

図1 定型平面の例(二家族用住宅: 左が1階、右が2階の住居)

最小住居の説明と関連してマイは、記事の中でフランクフルト市の住居希望者に関する統計を提示する。それによれば、同市で目下住居を求めている市民の内の「72%が2室住居、23%が3室住居、4.6%が4室住居、残りが5室もしくはそれ以上の住居」を希望しているという。つまりその大多数は小規模な住居を求めているという数値である。マイは「この数字を客観的な住居需要と解釈するのは誤りである」と注釈入りで示しているものの、実際には最小住居の建設を正当化する資料の一つとして言及しているように文脈からは受け取れる。彼はさらに「入念な住宅需要の調査」が必要であると述べ、「若い夫婦や子供が独立した老夫婦には、4室住居の標準的プログラムよりも小規模な住居を与える」というように、家族構成と住居の規模を対応させる必要性についても述べる。これもまた最小住居を供給する意義の一つを説明したものと解釈できる。

続いてマイは、フランクフルトで建設される最小住居の具体的な間取りについて図面入りで説明する。それは住居面積約36㎡の中に2室とフランクフルト・キッチン、トイレ、手洗い場が用意されるタイプである。ここで興味深いのは、この最小住居の供給という局面においても、彼は低層住宅に強いこだわりを見せている点である。彼はウィーンの住宅建設を引き合いに出し、「小住居を多層の賃貸住棟に集中させるウィーンのシステムはドイツの状況では基本的に受け入れられない」と述べ、その代わりに「2階建ての低層建築における最小住居の建設を遂行する」と言明する。

ここで提案された最小住居は、前章で図1とともに言及した2階建ての「二家族用住宅」の一例である。外からの玄関は一箇所でありながら、1階と2階に別々の世帯が住む形式であり、地下室には共用の風呂が用意される。この形式の最小住居の利点は、マイによれば、将来的に「1階と2階の住居を4室の住居へと統合し、一家族用住宅を創り出す」ことができる点にあった。また、家族構成の変化にあわせて2階の一部屋を1階の家族に割り当て、2階の残り一部屋を下宿人用とする代替案についても彼は説明している。さらに最小住居では、住居面積の大幅な削減に対応するために「ラディカルな空間の利用」が求められるとし、収納式のベッドによるフレキシブルな空間の利用についてもあわせて紹介している。

マイが最小住居の提案として低層を重視した理由は、ここでも庭にあった。その根拠は、「庭地は年間の長い期間において、限定された住居空間を補うものになる」という点にあった。「庭をもつ最小住居は、健康という観点からみたと、多層の賃貸住棟の中の、より規模の大きい住居よりも明らかに優る」とも述べる³²⁾。このような庭を重視する言説は、『新フランクフルト』の文章にも共通して見られたものだが、興味深いのは、マイがここで「最小住居でも低層を優先させる」という説明ではなく、「最小住居だからこそ庭をもつ低層の建築を建てるべき」という考え方を示している点である。それに対して多層の住棟に対しては否定的な言葉を記す。曰く、「大都市の賃貸住棟の4、5階の住居では、婦人は、乳母車を階段で下まで運ぶことを強えられる、あるいは子供を汚い道路に送り出し、近代的な大都市交通の危険にさらすことを強えられる³³⁾」といった意見が語られる。

以上見た1928年夏の新聞記事からわかることは、最小住居の実現形として、当初マイは低層住宅に強いこだわりを示していたという点である。対して、庭をもたない多層住棟の住居については、その

対象から除外しているように彼の文章からは読みとれる。

マイはこの最小住居の建設のための準備を進めていく。翌1929年にはフランクフルトの見本市会場において最小住居の二つのモデルルームを展示している。その紹介をマイは、1929年5月8日付の『建設行政中央新聞』に掲載された「最小住居」という論考の中で写真と図面入りで行っている³⁴⁾。ここで、最小住居の供給に対するマイの説明に少し変化が生じているのがわかる。それは、最小住居の例として前述の二家族用住宅だけではなく、外廊下型の多家族用住宅のタイプも新たに加えている点である。解説文の中でマイは、住宅建設費が高騰する状況下、不可避の課題である最小住居の供給において、「持続的な最小住居 [Dauerkleinstwohnungen]」と「過渡的な最小住居 [Uebergangskleinstwohnungen]」の二つのタイプが想定されると述べる。そして前者として3階建ての外廊下型住棟の住居(図4の平面図に対応)を、後者に二家族用住宅(図1の平面図に対応)を提案する。前者の間取りの特徴は、約23㎡の主空間を引き戸によって居間と寝室に分けること、同時に前述の収納式のベッドを採用することで、狭いながらも空間のフレキシビリティを高める工夫がなされている点にあった(図2)。他方、後者の「過渡的な最小住居」とは、すでに述べたように別世帯の1、2階の住居を将来的に統合し、一家族用住宅として用いることができるという発展可能性からその呼び名がついている。それをジードルンク・ヴェストハウゼンで約800戸実現させるとの見込みが述べられている。

このような「持続的」「過渡的」という最小住居のタイプわけは、前年の新聞記事では見られなかったものであった。その分類がなされたのは、マイがこの課題をより具体的に検討した結果だろう。その結果として、理想としての庭付きの低層住宅だけではなく、当初は否定的な見解を示していた、庭を持たない多層の住棟を最小住居のヴァリエーションに加えていくのである。ここにも、多層の多家族用住宅に新たに価値を見出していこうとするマイの姿勢の変化が表れていたと指摘することができる。そしてここで提案された最小住居が、マイが翌1930年の文章で多層の住棟に新しい可能性をもたらすものと記すことになる「外廊下型住棟」の住居となっている点は注目したい。そのようにマイは、最小住居という当時の喫緊の課題を、むしろ自身の新しい住居形式の提案の場と位置づけていたと見ることができるからである。

5. 1929年「生活最小限住居」展でのフランクフルト市の出展姿勢

3、4章で見た、マイによる住居形式とその定型平面の整備、そして最小住居への取り組みと関連して注目したいのが、1929年の第2回CIAM会議にあわせてマイらの準備のもとにフランクフルトで開催された展覧会である。続いてこの展覧会の内容を検討し、マイのフランクフルトでの住宅建設活動との関係を考える。

最初にこの展覧会の実施の経緯について説明したい³⁵⁾。近代建築を推進する建築家たちの国際的な組織、CIAM(近代建築国際会議)は1928年6月にスイスのラ・サラ城で第1回会議を開催した。エルンスト・マイもその設立メンバーに加わった。すでにこの第1回会議の時点で、第2回の会議をフランクフルト市で開催することが提案されていたとされる。フランクフルトが選定された理由については定かではないが、『新フランクフルト』を通して発信されるマイらの建設活動が注目されていたことはあるだろう。なお、第1回以後

の会議のコンセプトを最初に策定したのは、H. シュミット、S. ギーディオンらスイスからのメンバーだったとされる。第2回会議の準備のために、1929年2月2日にはスイスのバーゼルでCIPRAC³⁶⁾と称する代表者委員会の会合が開かれ、マイも参加した。この時点ではすでにフランクフルトでの開催が決定しており、会議のテーマを「小住居の社会的要請と技術的実現」とし、講演者をマイ、ル・コルビュジェ、W.グロピウス、V.ブルジョアらとすることが提案された。さらにこの会合で、会議にあわせて展覧会を実施することや講演録の出版も話し合われた。前章で述べたように、1928年秋よりフランクフルトでは最小住居の供給が優先課題と位置づけられており、この会議テーマの選定には当時のマイの住宅建設への取り組みも考慮されていたことは推測できる。CIPRACによる準備会合はその後も行われ、講演者の選定やプログラムの詳細など、実施に向けての準備が進められていく。マイと新フランクフルトの共同作業者たちも会議の準備に中心にかかわることになった。1929年8月には会議の正式なタイトル「生活最小限住居」がドイツ語圏の報道関係者に公表された。当初1929年9月に予定されていた会議は、1ヶ月遅れて同年10月23日から26日にかけて開催された。この会議と並行して、1929年10月26日よりフランクフルト市見本市会場の工作連盟館で同名の展覧会が実施された。これもマイらフランクフルト市建築局が準備したものであり、中心となったのはオランダ人のマルト・スタムとマイらとされる³⁷⁾。この展覧会は同年11月1日まで続き、その後欧州諸都市を巡回した。さらに会議の記録と合わせて展示内容が同名の出版物『生活最小限住居』(初版1930年)に再録された³⁸⁾。同書は、1933年に早くも第3版が出版され、この会議と展覧会の内容を広く世に知らせるものとなった。

展覧会では、約100例の最小限住居(70㎡を上限とした³⁹⁾)の提案がそれぞれ1枚のパネルに展示されていた(図3)。その表現は全事例で統一されていた。1/10の平面図が中心となり、その下に1/50の断面図と1/500の配置図、そして床面積、容積、窓面積の各数値が記されている(図4)(実現未定の計画案もあったため、断面図や配置図がないものもある)。客観的な比較を可能にするために各事例には都市名しか記されておらず、設計者やジードルンクの名称は一切記載されていなかった。また、写真や外観のわかる図もなかった。その点で従来の建築展とは異なる斬新な形式をとっていた。

この展覧会に出展された100点超の事例が若干の編集を加えられ、上述したように『生活最小限住居』に再録された⁴⁰⁾。その再録内容は展覧会とほぼ同内容と考えられるため、この出版物の再録をもとに展覧会で展示された事例の特徴を見てみたい。そこには「一家族用住宅」18例(No.1~18)、「二家族用住宅」7例(No.51~57)、「多家族用住宅」65例(No.101~165)、「特別事例」7例(No.201~207)の計97例が掲載されている。「特別事例」とはホテルや船室などの最小規模の空間であり、フランクフルトの事例はないことからここでは除外して考えたい。そうすると、ここでも「一家族用」「二家族用」「多家族用」という区分が住居形式の分類基準として用いられていることがわかる。マイが1930年の文章に至り、上記の区分に従って住居形式を整理し、住居の定型平面を提示したことは3章で見たとおりだが、その背景には1929年の展覧会での取り組みも影響を与えていたことが推測される。

同展覧会はヨーロッパ諸都市およびアメリカの事例を見比べられ

るものだったが、出展事例の4割はドイツ都市からのものであり、その約半数の23事例が開催地フランクフルトのものであった。そして興味深いことに、フランクフルトの23事例の内、「一家族用住宅」と「二家族用住宅」はそれぞれ1例と2例であり、残る20例が「多家族用住宅」だったのである。最小限住居の展覧会であるから、住宅供給効率の良い「多家族用」が多くなるのは当然だが、比率で見てもフランクフルトは「一家族用」ではなく「二家族用」「多家族用」の住居を重点的に出展していたことは明らかである。

展覧会では実際に建設中(もしくは建設済み、建設予定)の事例と実現未定の構想案が同様に展示されており、上述したように設計者やプロジェクト名が伏せられていたため、名称を特定できないものが多い。事実、先行研究でも個々の事例について具体的に言及している例はほとんどない。本稿では、フランクフルトの23事例について、各住居の特徴をまとめ、可能なものはプロジェクト名を特定することを試みた(表1)。結果、具体的なプロジェクト名が特定(もしくは推定)できたものは半数程度にとどまったが、それでも出展内容に見られるいくつかの特徴を指摘することはできる。

フランクフルト市の事例中、実際に建設されたジードルンクの住居との関係が判明したものは、マイが実験ジードルンクと位置づけるブラウンハイムの4例(No.11, 52, 122, 162)、先述の二家族用住宅を中心として建設されるヴェストハウゼンの3例(No.115, 119, 136)、展覧会準備の中心メンバー、スタムが設計したヘラーホフ(1929年建設)の3例(No.113, 123, 137)、就業中の单身女性のための住棟(1930-31年建設)(No.102)の1例の計11例のみであった。それまでにマイらは数多くのジードルンクを建設していたが、その多くは展覧会への出展から除外されたと見られる。このことは、マイのフランクフルトでの当初の住宅供給が最小住居を前提としていなかったことを考えれば当然のことである。残りの事例の多くは未発表の計画と考えられることから、この展覧会はむしろ、同市が以後実現させようとする住居タイプを主に提示しようとしたものだったと推測される⁴¹⁾。見方を替えればこの出展傾向は、最小住居の供給に舵を切るフランクフルト市の方針転換を示すものだったと見ることもできるだろう。展覧会に出展された各平面は、住居面積の小さいものから順に番号を付されているが、「多家族用住宅」の65例

図2 持続的最小限住居の室内(ベッドは壁に収納されている)

図3 「生活最小限住居」展の風景

図4 展示の1例(No.122).
ジードルンク・ブラウンハイムの
外廊下型住棟の住居と思われる

(No.101～165) の内、フランクフルトの 20 例は前半の番号に多く見られる (表 1)。そのことからフランクフルトが他都市に比べて特に小規模な事例の展覧を意図していたことがわかる。

一方で、表 1 からわかるように、この展覧内容は翌 1930 年にマイが『新フランクフルト』で提示することになる先述の「フランクフルトの定型平面」とは必ずしも対応していないことも指摘できる。この点については次のように言えないだろうか。1930 年のマイの「定型平面」がすでに実現したもの、もしくは実現を前提とした標準解を示していたのに対し、1929 年の展覧内容は、よりラディカルにフランクフルトの住宅供給の将来的な提案を示すものだったと。それと関連して注目されるのは「外廊下型住棟」の住居の多さである。フランクフルトが展覧した「多家族用住宅」20 例の内の 16 例が、マイが多層住棟に新しい可能性をもたらすものと考えていた「外廊下型住棟」の住居となっている。生活最小限住居という当時の喫緊の課題に対してできる限りの新しい提案を盛り込もうとしたマイらの姿勢を示していると言える。

同時にこれら展覧事例の多くは、表 1 からその一端がわかるように、マイが「フランクフルトのタイプ」に求める諸原則を満たすものであった。すなわち居間を規模の大きい中心的な空間とすること、家事の省力化のためにキッチンコンパクトに設えること、たとえ狭くてもできるだけ分離した寝室を用意すること、トイレ・浴室を用意すること、といった先述の原則である。その点では「フランクフルトの定型平面」と同じ方向を目指すものだったのである。

抽象度の高い図面を解説なしに見比べるという寡黙な展覧会ではあったが、このようなフランクフルトの展覧姿勢は、同市が「多家族用住宅」の最小住居に力を入れていくというメッセージを対外的に示すものとなっていたと言える。ここにも、理想としていた庭付きの一家族用住宅とは別に、多家族用住宅の小規模住居の可能性を探っていくマイの試行の跡が表れていたと見ることができる。

6. 結語

本稿では、1920 年代後半フランクフルトにおけるエルンスト・マイの住宅供給への取り組みを、マイの文章と展覧会をもとに 3 つの

観点から考察した。その結果を以下にまとめた。

第 3 章では、『新フランクフルト』にマイが発表した文章の比較を通して、彼の 5 年間の住宅建設コンセプトの展開と住居形式の整備の実態を明らかにした。フランクフルトのジードルンク建設において、マイはブレスラウ時代に構想した自然と近接する衛星都市の理想を掲げ続けた。彼は庭付き低層の一家族用住宅を、住人にとって健康的で理想的な住居形式と主張し続けたが、現実には住宅不足解消と建設費抑制の必要から、次第により経済的な住居の大量供給が求められていった。その転換点となったのが 1928 年秋の住宅建設プログラムの修正であった。住居形式への言及は 1930 年の文章で詳細になり、理想としての一家族用住宅だけではなく、二家族用住宅や、外廊下型住棟による多家族用住宅などの新しい住居形式の意義も語るようになった。同じ文章では「一家族用」「二家族用」「多家族用」の区分に従って住居の定型平面が独特の略号を用いて示されたが、その事例群からは「多家族用住宅」の小規模な住居を優先課題へと転換したマイの姿勢を読み取ることができた。

第 4 章では、マイの住宅供給に転換をもたらした 1928 年秋の最小住居への取り組みを、彼の文章をもとに具体化した。1928 年夏に記された新聞記事において、マイは最小住居の形式として、庭との結びつきが確保される 2 階建ての二家族用住宅に強いこだわりを示していた。しかし翌年 5 月の記事でマイは、その形式を「過渡的な最小住居」と呼び、それに対して「持続的な最小住居」としての外廊下型住棟の住居を、選択肢に加えていく。ここにも理想としての庭付き低層住宅に加えて、多層の多家族用住宅に可能性を見出していくマイの姿勢の変化を見ることができた。

第 5 章では、1929 年の第 2 回 CIAM 会議に際して企画された展覧会「生活最小限住居」におけるフランクフルト市の展覧内容を考察した。「一家族用」「二家族用」「多家族用」の住居区分に従って展覧された最小限住居の平面の内、フランクフルトは多家族用住宅に比重を置いており、他都市と比べても、小規模な事例を多く提示していた。これらフランクフルトの展覧事例は、必ずしも実現した住居の平面とは対応しておらず、1930 年の定型平面との対応も少なかったが、同時にマイがフランクフルトの住居に求めた諸原則に従うも

表 1 「生活最小限住居」展に展覧されたフランクフルト市による最小限住居の事例とその特徴

No.	実際のジードルンクとの対応	面積(m ²)	居間(m ²)	住棟階数	部屋数	寝室数	ベッド数	バルコニー	外廊下型	住居の特徴など	1930年の定型平面
11	Praunheim第3期の一家族用住宅	55.4	18.1	2	3	2	3			間口の狭い連棟式の一家族用住宅	EFA3.56
52	Praunheim第2期の下宿人用住居	29.9	15.9	3	2	1	2	○		連棟式一家族用住宅の3階部分	ELITE 2.30
55	(Schwagenscheidt, Winter設計*)	41	18.2	2	2	1	2			過渡的住居形式としての二家族用住宅	ZWOFADOLEI 2.40
102	Baublock Platenstrasse(B.Hermkes設計)	23	16.3	2	1	1	1	○	○	就業単身女性用住居	
103	(Schwagenscheidt, Kratz, Winter設計*)	26.1	13.5	2	2	1	1		○	1～2名が暮らす就業女性用住居	
106		30.3	14.5	2	2	2	4			四家族用住宅(1つの階段室周りに4住戸)	
108		31.8	17.6	4	2	1	2		○	玄関前の外廊下にベンチ付ニッチを配置	
113	Hallerhof(M.Stam設計)	36	13	2	2	1	2	○	○	北に外廊下、南に居間・寝室・凹状バルコニー	
114		37.4	16.6	3	3	2	3		○	間口狭く、奥行き深い。居間は寝室を介して外面	
115	Westhausenの外廊下型住棟の住居か	38.2	18.7	4	3	1	2		○	外廊下の反対側に居間と寝室を配置	
116		38.3	17.6	4	2	1	2	○	○	外廊下側に寝室、反対側に居間とバルコニーを配置	
119	Westhausenの外廊下型住棟の住居か	39.6	17.2	-	2	1	2	○	○	一つの階に様々な室構成の住居を用意	
122	Praunheim第3期の外廊下型住棟の住居	41.3	14.8	3	3	2	3	○	○	居間と寝室を引き戸で緩やかに分離。収納式ベッド	MEFAGANG 2.41
123	Hallerhof(M.Stam設計)	42.1	13.7	3	3	2	4	○		階段室型。居間とキッチンが引き戸を介して接続	
125		42.3	13.1	-	3	2	4		○	外廊下側に居間。キッチンは外面せず	
132		46	19	3	3	2	4			階段室型。細長い2寝室の間に浴室を配置	
133		46	23.8	-	2	1	2		○	L字形平面。隣接する2住居の寝室がかみ合う構成	
136	Westhausenの外廊下型住棟の住居	47	19.3	4	3	2	4	○	○	外廊下側に子供用寝室、反対側に主寝室と居間を配置	
137	Hallerhof(M.Stam設計)	47.5	14.8	-	3	2	4	○		寝室を東、居間を西に配置。No.123の変形	
138		48.3	18.4	-	4	3	5	○	○	一つの階に様々な室構成の住居を用意	
147		53	17.4	4	4	3	5		○	メゾネット型住居を2戸積層する形式	
161	(Eugen Kaufmann設計*)	59.2	20	4	3	2	4	○	○	メゾネット型住居を2戸積層する形式	
162	Praunheim第3期の外廊下型住居と類似	63.4	27.4	4	3	3	6	○	○	居間中心型の構成。A.Brenner設計の住棟に類似	

注: (*)の設計者名は、Das Neue Frankfurt, 1929, pp.212-221の紹介記事から得た情報による。／「寝室数」には居間と寝室を兼ねている例も入っている。

のであった。そのことからこの展覧会への出展内容は、同市の住宅供給の将来的な提案をよりラディカルに示すものだったと本稿では指摘した。ここにも一家族用住宅という理想とは別に、多家族用住宅の小規模住居の可能性を探っていくマイの試行の跡が見られた。

以上のように本稿では、3つの側面からマイが庭付き低層の住宅地を理想としつつも次第に効率的かつ経済的な住居の追求へと移行していく状況を提示した。今後さらに他建築家、他都市との比較を通して、マイの活動の位置付けを明らかにしていきたい。

注

- 1) Christoph Mohr, Michael Müller, *Funktionalität und Moderne. Das Neue Frankfurt und seine Bauten 1925-1933*, Frankfurt a.M., 1984 (以下、Mohr(1984)) および Heike Risse, *Frühe Moderne in Frankfurt am Main 1920-1933. Architektur der zwanziger Jahre in Frankfurt a.M. Traditionalismus – Expressionismus – Neue Sachlichkeit*, Frankfurt a.M., 1984
- 2) *Neues Bauen Neues Gestalten: DAS NEUE FRANKFURT/ die neue Stadt: Eine Zeitschrift zwischen 1926 und 1933*, Berlin, 1984
- 3) DW Dreyse, *May-Siedlungen: Architekturführer durch acht Siedlungen des Neuen Frankfurt 1926-1930*, Köln, 2000 (3., aktualisierte Auflage)
- 4) Claudia Quiring et al. (ed.), *Ernst May 1886-1970*, München/London/New York, 2011 (以下、Quiring(2011))。本稿ではマイの生涯や活動に関する基本的な事実について、特記なき場合、同書を参照している。
- 5) 後藤俊明「1920年代後半ドイツにおける社会的住宅建設の展開—フランクフルト・アム・マインの事例を中心に—」『商学研究』第39巻1号、1995年9月、pp.67-180
- 6) 本研究のために、ニュルンベルクの Germanisches Nationalmuseum に併設されたドイツ芸術史料館所蔵のエルンスト・マイ史料の調査を行い、主としてマイの活動に関する同時代の新聞記事を収集した。
- 7) 1929年の第2回 CIAM 会議にあわせて開催された「生活最小限住居」展については上記の各先行研究でも触れられるが、さらに CIAM 研究との関連でも語られる。例えば Martin Steinmann (ed.), *CIAM. Internationale Kongresse für Neues Bauen: Dokumente 1928-1939*, Basel, 1979, pp.66-71, Eric Mumford, *The CIAM Discourse on Urbanism, 1928-1960*, Cambridge, 2002, pp.40-42 (以下、Mumford(2002))、Kees Somer, *The functional city: the CIAM and Cornelis van Eesteren, 1928-1960*, Rotterdam, 2007, pp.32-33 など。ただそれらの展覧会に関する言及はほとんどが表面的なものであり、展示内容に何らかの意味を見出そうとする研究は見あたらない。なお 2011 年にフランクフルトでの CIAM 会議をテーマとした論文集 Helen Barr (ed.), *Neues Wohnen 1929/2009: Frankfurt und der 2. Congrès International d'Architecture Moderne*, Berlin, 2011 が出版された。そこでは同展覧会についても情報が補足されており、本稿執筆にあたり参考とした(特に Helen Barr, “Frankfurt 1929: Der Kongress tagt - eine Rekonstruktion des CIAM II”, pp.27-38(以下、Barr(2011))。
- 8) 筆者は別稿(拙稿「オットー・ヘスラーのジードルンク・ブルームレーガー・フェルトにおける最小限住居の成立と変遷」『日本建築学会計画系論文集』2014年2月)にて、「Kleinstwohnung」に対して「最小限住居」という訳語を用いたが、本稿では展覧会「生活最小限住居」との違いを明確にするために、「最小住居」という訳語を用いることとした。
- 9) マイのプレスラウ時代の活動については、Beate Störckuhl, “Ernst May und die Schlesische Heimstätte”, in: Quiring(2011), pp.33-49 を参照した。
- 10) Ernst May, “Stadterweiterung mittels Trabanten”, *Der Städtebau*, Jg.19, 1922/1923, pp.51-55
- 11) マイの管轄下には「建築局 [Hochbauamt]」「ジードルンク局 [Siedlungsamt]」「建築警察 [Baupolizei]」の3つの部局が置かれた。さらに建築局には「大規模建築」「住宅建築における定型化」「建築指導」、ジードルンク局には「都市計画」「地域計画」「造園」「土地所有管理」「住宅建設貸付金」の担当部局が設置されていた (Mohr(1984), p.34)。
- 12) それぞれ Ernst May, “Wohnungspolitik der Stadt Frankfurt am Main”, *Das Neue Frankfurt*, 1.Jg./April-Juni 1927 / Nr.5, pp.93-104 (以下、May(1927))、Ernst May, “Grundlagen der Frankfurter Wohnungsbaupolitik”, *Das Neue Frankfurt*, 2.Jg. / Juli-August 1928 / Heft 7/8, pp.113-124 (以下、May(1928))、Ernst May, “Fünf Jahre Wohnungsbautätigkeit in Frankfurt am Main”, *Das Neue Frankfurt*, 4.Jg. / Feb.-März 1930 / Heft 2-3, pp.21-51 (以下、May(1930))
- 13) *Beilage zum II. Morgenblatt der Frankfurter Zeitung*, 7.November 1926
- 14) May(1927), pp.93-94

- 15) 以上の引用は、May(1927), p.94 から。
- 16) May(1928), p.113。続く引用文も同頁より。1930年の文章ではこの数字は1927年が2865戸、1928年が3259戸に修正されている (May(1930), p.23)。
- 17) May(1928), pp.115-116
- 18) 以上の引用は、May(1928), p.116 から。
- 19) May(1928), pp.116-117 による。
- 20) 以上の引用は、May(1930), pp.22-24 から。
- 21) May(1930), p.47
- 22) 例えば、May(1928), p.115 など。
- 23) “Hochbau oder Flachbau?”, in: May(1930), pp.36-37。続く5段落における引用はすべて同箇所から。
- 24) マイはここで Einzelreihenbebauung という言葉を使っているが、いわゆる「Zeilenbau」(=平行配置型住棟)のことと思われる。
- 25) May(1927), pp.96-98。続く段落の引用は同箇所から。
- 26) フランクフルト・キッチン [Die Frankfurter Küche] については、拙稿「マルガレーテ・シュッテ=リホツキーの「家事の合理化」：翻訳と解題」『東京工芸大学工学部紀要』(Vol.34, No.1)，2013年1月，pp.6-18を参照。
- 27) May(1930), pp.37-39
- 28) “Frankfurter Typengrundrisse”, in: May(1930), pp.52-55
- 29) マイは最小住居の面積の上限を具体的に設定しているわけではないが、後述する CIAM 第2回会議の講演録「生活最小限住居」(注38の *Die Wohnung für das Existenzminimum* に再録)の中で、生活最小限住居に住みたがらない人々が望む住居の最小規模を 50 m² と指摘しており、その記述から 50 m² を最小住居のおおよその上限と見なしていることが推測できる。
- 30) Ernst May, “Ein Wohnungsbauprogramm für Frankfurt a.M.”, *Frankfurter Zeitung*, 8.Juli 1928 および Ernst May, “Kleinstwohnung oder keine Wohnung?” *Frankfurter Zeitung*, 24.August 1928 (以下、May(1928.8.24))。この2つの記事ではほぼ同様の主張がなされている。以下の本論の記述は、7月の記事からの引用を基本とし、May(1928.8.24)からの引用箇所は注に示した。
- 31) “4000 neue Wohnungen. Ein Plan zur Beseitigung der Frankfurter Wohnungsnot”, *Volksstimme*, 23.August 1928 (執筆者不詳)
- 32) 実際に建設されたジードルンク・ヴェストハウゼンの二家族用住宅では、1階の住人は居間と直結する西側の庭を使用し、2階の住人は玄関前の東側の庭を使用するという形で、両方の住居に庭が割り当てられていた。
- 33) May(1928.8.24)
- 34) Ernst May, “Kleinstwohnungen”, *Zentralblatt der Bauverwaltung*, Berlin, 1929, pp.297-300
- 35) この経緯については主として Barr(2011)および田所辰之助「第二回近代建築国際会議と『生活最小限の住宅』」『住宅建築文庫集成 第23巻 生活最小限の住宅』柏書房, 2013, pp.225-252)を参照した。
- 36) 「現代建築の問題実現のための国際委員会 [Comité international pour la Réalisation des Problèmes d'Architecture Contemporaine]」
- 37) Barr(2011), p.32。さらに Hans Leistikow, Joseph Gantner の名も挙げられている。このように「生活最小限住居」展はマイ一人の業績ではないが、フランクフルト建築局を統括するマイの意向が強く反映されていると考えられることから、本研究ではマイの活動を判断する材料の一つとした。
- 38) *Die Wohnung für das Existenzminimum*, Frankfurt, 1930。前半に会議の講演録、後半に展覧会に出展された平面図が再録されている。
- 39) E.Kaufmann がこの展覧会の報告を『新フランクフルト』に寄稿しており (“Die internationale Ausstellung „Die Wohnung für das Existenzminimum““, *Das Neue Frankfurt*, 1929, pp.213-217)、その214頁に最小限住居の面積上限が 70 m² であると書かれている。このことからわかるように、その選定基準は最小限住居と呼ぶには緩やかなものであった。なお本論文中の展覧会の描写は、同記事を参照している。
- 40) 先行研究(例えば Mumford(2002), p.40)では展覧会に207の事例が出展されていたと記すものもあるが、事例番号が207までであることによる誤解と思われる。実際はこの出版物の前注(第3版, p.45)にも記されているように、平面図の再録は展示内容をほぼ完全に再現したものと考えられる。
- 41) この中には当時8530戸の大ジードルンクとして計画中だったジードルンク・ゴルトシュタイン [Goldstein] の住居平面も含まれていた可能性があるが、その計画が不明なため、特定できなかった。このジードルンクはマイらのソ連移住後、彼らの計画とは別の形で1932-36年に実現する。

図版出典

図1: *Das Neue Frankfurt*, 1930, p.53, 図2: *Zentralblatt der Bauverwaltung*, 1929, p.298, 図3: *Das Neue Frankfurt*, 1929, p.213, 図4: *Die Wohnung für das Existenzminimum* (第3版のリプリント (1979年)より)

(2013年11月6日原稿受理, 2014年3月10日採用決定)